

工されました。大極殿は四周に回廊を巡らせていて、これに囲まれた部分を大極殿院と呼んでいます。今次調査は、大極殿院復原事業の事前調査です。調査地は大極殿院の南端、南面回廊の中央に開く大極殿院閣門こくもんの西側です。調査面積は1260㎡。

調査地から閣門を挟んだ対称の位置では、1972年に発掘調査が行なわれ、南面回廊の北半部に食い込むような建物があったことがわかりました。このとき掘り上げられたのが、平城宮跡遺構展示館に「平城宮最大の柱」として展示されている掘立柱ほりたての柱根です。その大きさから、この建物は高い柱をもつ楼閣建築であったと推定され、「東楼」と呼んでいます。



発掘現場

発掘調査は、東楼と対称の位置に西楼にしろうはあるか、西楼の規模と構造は東楼と同じか、をテーマとしました。10月11日、まず調査区西半から着手。確認できた遺構は、西楼取り壊し後に敷き詰められた小石層、西楼の掘立柱抜き取り痕跡と礎石の据え付け痕跡、回廊礎石の据え付け痕跡、大極殿院内庭に敷かれた小砂利など。それらはまさに東楼を折り返した位置に現れました。

今季の調査は東半の小石層を確認して、しばしお休み。東半の遺構確認や柱穴の掘り下げは来年度実施する予定です。はたして「最大の柱」を上回る巨大柱根は眠っているのか。（平城宮跡発掘調査部）

#### 藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第117次）

秋の現場班は、10月から大極殿院東回廊部分の調査を開始しました。大極殿東方に建つ東殿を対象とした北区（約1200㎡）と、回廊およびその東側に建つ大型建物西端の確認を目的とした南区（約500㎡）に分けて調査しています。

この一帯は、約60年前に日本古文化研究所が壺掘り調査をおこない、遺構の概略が判明しています。

今回はそこを面的に調査し、回廊と東殿の細部構造を明確にすることが目的です。12月現在、南区についての調査が進行中です。

まず南区の東端では、1999年度の調査で確認した東西棟大型礎石建物の西妻を検出しました。これによって、桁行9間、梁行4間の規模をもつことが確定し、藤原宮では大極殿に次ぐ大規模な建物であることがわかりました。

また、大極殿を取り囲む回廊は、幅6mの複廊であることを確認しました。2カ所に礎石が残りますが、他の礎石は後世に抜き取られています。この周辺には、大量の瓦が堆積していました。

なお、11月初旬には、カンボディアからの研修生



回廊周辺瓦堆積の調査風景

3名を迎え、国際色豊かな現場となりました。調査は3月までの予定で、これから北区（東殿）の本格的な調査に入ります。

#### 石神遺跡の調査（飛鳥藤原第116次）

石神遺跡は、斉明朝（655～661年）のころに異国や辺境の民への饗宴をおこなったり、客館として機能した場所と考えられています。現在、飛鳥資料館に展示している石人像と須弥山石は、明治時代にこの遺跡から掘り出されたものです。

調査は7月からはじまり、およそ5カ月かかってようやく終了しました。発掘した面積は約500㎡ですが、遺構が複雑に重なりあっているため、ひじょうに手間がかかります。

今回の調査では、斉明朝の石神遺跡の北を区画する施設がみつかりました。調査区を横断する東西の掘立柱塀と、それに並行する石組みの水路です。また、この水路とT字形に接続する南北の水路も2条あり、いずれも石で護岸されています。さらに、いくつかの掘立柱建物のほか、時期の違う遺構も確認しています。

これらの遺構をご覧いただくために、現地説明会を10月6日に開催しました。新聞・テレビで報道されたこともあって、参加者約600人と盛況でした。

調査終了後、現地は水田に戻っています。



石神遺跡の全景と調査区（北から）

#### 奥山廃寺の調査（飛鳥藤原第114-8次）

明日香村にある奥山廃寺の東門改修にともなう事前調査です。東西3.5m×南北2mという小さな調査区ですが、南北に並ぶ金堂と塔の中間部分の東側にあたり、これまでの調査成果から、奈良時代に施された瓦敷きの検出が期待されました。

瓦片と礫がつまった、まさに瓦礫というにふさわしい層を掘り下げると、瓦敷きが顔を出しました。意識的に凸面を上に向けて敷いた比較的大きな平瓦や、ばらまいたと思われる小片があり、その中には長さ38cm、幅25cmをはかる鴟尾の破片もあります。奥山廃寺での鴟尾の出土は初めてです。

この瓦敷きの下層には、7世紀前半の瓦で整地した瓦層があり、瓦敷きを施す前に、比較的大規模な伽藍内建物の改作があったことがうかがえます。

わずかな面積の調査でしたが、実りの秋にふさわしい成果をあげることができました。



奥山廃寺の調査区と塔跡に建つ十三重石塔

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

## 文化財関係研修の実施

### 発掘技術者研修 「文化財写真課程」

8月21日より9月21日の日程で、文化財写真課程の研修をおこないました。

今回から、平城宮跡発掘調査部に新設された「写真資料調査室」が担当で、本年の参加者は例年よりすこし少な目の10名で、「少数精鋭」の研修でした。

本研修の内容は、文化財調査に必要不可欠な「写真記録」に対する基礎知識や、技術の修得を目的とした研修で、その内容は非常に多岐にわたります。まず、記録材料である写真感材の基礎知識から撮影、そして撮影された写真の保存から、その活用である印刷技術の基礎知識まで及び、1カ月という長期間にもかかわらず、例年やや消化不良の感が否めない研修です。

本年の参加者は少人数が幸いして参加者各自が指導者と十分なコミュニケーションを取ることができ、理解度は高かったと思われます。

前半の座学ではいわゆる「写真専門学校」で教えるような専門知識を講習するため、写真の専門教育を初めて受ける研修生はついていくのに精一杯の様子がありありと見え、理解する段階にはなかなか達しないようです。

後半には実習があり、参加者は撮影から現像・焼き付け、図版割付までを2名ないし3名のグループでおこなっています。図版割付の時、参加者が口々に声を上げます。「縦画面が必要な図版で縦画面の写真がない」「露出不良でコントラストのしっかりした写真がない」「フレーミングが悪くてトリミングができない」「ピントが合っていない」

上流（撮影）で流した汚水は下流（印刷）で取り除くことはできない。つまり「よい撮影をすることがすべてに優先する」という文化財写真の基本を実感することになります。

講師陣には、我が調査室のスタッフをはじめ、写真業界の第一線で活躍している外部講師や、印刷業界の最前線に行く印刷会社の技術者をそろえています。講師陣すべてが「埋蔵文化財写真は撮影された写真そのものが文化財であり、豊富な情報量とそれを保存する環境がなければ文化財写真とはいえない」という共通の考え方に基づいて講義をおこなっ